

先生の挨拶に続いて賑やかに会員相互の親睦が計られた。料理は思った以上においしく、食べきれないほどであった。西原氏の持参されたお酒の人气が高かったためか、あるいはビールのおいしい季節であったせいも、注文した日本酒は大分余ったようである。

2日目は、マイクロバス、ジャンボタクシー、普通のタクシー、そして自家用車という4台の車に分乗するという変則的な編成で、朝8時半より宍道湖を一周するコースで水草の観察を行ない、平野部と丘陵部のため池および斐伊川河口を訪れた。参加者は40名であった。まず宍道湖の北岸の「灘」という場所にある舟溜りにおいて、オオササエビモ（開花中）、セキショウモ、エビモの生育を観察した。このコンクリート壁にはフナムシもあり、宍道湖が海につながっていることが実感できた。次に大垣町にある「円木池」を訪れた。この池は宍道湖周辺のため池のうちで、もっとも水草の種類数が豊富な池である。当日は岸辺からの観察ということもあり、また時期的に早かったせいもあり、それ程多くの種は見られなかったようである。それでも抽水植物のマコモや浮葉植物のヒシ、ガガブタ、ジュンサイ、ヒツジグサの他、アオウキクサ、クログワイ、イヌタヌキモ、ホソバミズヒキモ等が見られ、池に隣接する水田にはシャジクモが繁茂していた。その次の「池裡池」にはヒシ、ガガブタが見られ、小水路にはキクモが生えていた。平田市の「胡麻谷」には多数のため池があり、オグラノフサモ、ヒツジグサ、ジュンサイ、ホソバミズヒキモ、マツモ、ヒシ等が見られた。

昼食後、斐伊川河口域の小河川のひとつである「学頭屋（がくとうや）川」で、アサザ、オオカナダモ、ササバモ、ヤナギモ、ホソバミズヒキモ、オモダカを確認した。次の目的地は、有名な玉造温泉の南に位置する標高約400mの「忌部（いんべ）高原」である。この自然休養林にはいくつかの池があり、フトヒルムシロ、ジュンサイ、ヒツジグサ、タヌキモの仲間等、弱酸性の水体を好む水草が多く見られた。

以上の観察を終え、松江駅には予定通り午後3時半に到着した。当日はよく晴れた暑い一日で、午後のために用意したジュースを昼食前に飲んでしまったりした。時間の限られたスケジュールであり、あわただしい観察会であったと思うが、とりあえずは宍道湖周辺の水草相を概観してもらえたのではと考えている。

至らない点が数々あったにもかかわらず、無事に本年



〔写真〕円木池での観察風景

度の全国集会を終えることができたのも、参加者の皆様のご協力の賜と考えております。ここに深く感謝いたします。

(国井秀伸 記)

#### 〔総会報告〕

##### I. 報告事項

##### 1. 会員状況 (1988.8-1989.7)

入会	18名
退会	7名
会則8条による退会	4名
現会員数	248名

##### 2. 昭和63年度事業報告

- ・会報発行 No.31 (3月), No.32 (6月), No.33・34 [10周年記念号] (1989年1月)
- ・第10回全国集会開催 (8月6~7日、東京都立神代植物公園)

##### 3. 昭和63年度会計報告

##### 〔収入〕

前年度繰越金	292,056
会費	663,500
別刷代	12,000
バックナンバー売上金	87,100
利息	3,285
全国集会余剰金 (寄付金含む)	191,076

合計 1,249,017

## 〔支出〕

会報印刷費	555,000
会報発送費	126,330
封筒印刷費	20,000
通信費	49,190
文具費	8,460
その他	7,500
<hr/>	
合計	766,480
次年度繰越金	482,537

## II. 審議事項

## 1. 1989年度事業

- ・会報発行 No.35 (3月), No.36 (6月)  
No.37 (9月), No.38 (12月)
- ・全国集会 7月29～30日 (松江市)
- ・会員名簿作成

## 2. 1990年度全国集会開催地

- ・新潟市にて行うことに決定

## 3. その他

来年は、牧野富太郎博士によるムジナモ発見100周年にあたり、その記念碑をつくる事業が進められている。当会としてもこれに協力することが決定された。

本会報の39～40ページに「趣意書」ならびにムジナモ発見の経緯にふれた文書を掲載しています。御賛同される方は一口でも二口でも御協力下さい。送金は下記口座への銀行振込を望むとのことです。

〈送金先〉東京都商工信用金庫江戸川駅前支店

普通 28-0054938

ムジナモ記念碑をつくる会

代表 中川 巖

〈送金締切日〉平成2年3月末日

## ○中沢信午著『マリモはなぜ丸い』（中公新書、1989年7月、178頁、520円）

マリモに関し本誌にも何度か寄稿されている中沢信午先生が、おもしろい本を出版された。マリモと言えば阿寒湖を思い浮かべるが、この藻類は国内でも10余りの池沼から記録されている。しかし、美しい球状をなすのは阿寒湖のマリモだけである。欧米にも“マリモ”と称されるものはあり、話題はその正体に広がる。その中でも真に球状のマリモが産したオーストリア・ツェラー湖におけるマリモ絶滅の跡が、筆者の調査行の記録とともに紹介される。

話は、阿寒湖のマリモはなぜ丸いのかという問題に移り、さまざまな仮説とそれを検証するための実験の結果を紹介して、球形マリモの成因にせまる。土産物屋やデパートで売られているマリモと阿寒湖のマリモとは、全く別のつくりをもったものであることも明かされている。このようにマリモの謎にせまりながら、球形マリモ最後の生育地となった阿寒湖の将来も決して楽観できないことを訴え、永遠にマリモを残してゆくための方策について、著者の考えを述べている。全体を通じ平易で興味深く書き進められており、マリモを知るための好著となっ

ている。

## ○渡辺定路『福井県植物誌』（自費出版、1989年2月、416頁+58図版、7,000円）

本書は、福井県に自生する全ての植物（シダ植物以上）を網羅することを第一の目的として完成された植物誌である。その基礎になった標本の大半の採集と原稿の執筆は著者ひとりの手になるというから敬服する。内容は58枚の図版（一部はカラー、大半はモノクロ写真）につづき、地質・地形、気候、植物相の成り立ちなどを概説したあと347ページにわたる植物目録がまとめられる。この目録には標本産地と種の特徴が手短かに付記されている。水草に関しては、エゾヒルムシロなど2、3気にかかる種もあがっているが、よく標本も採られているように福井県下の産状の概略を知ることができる。

（角野康郎）